
東方獣狼鳥

黒江念

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方獣狼鳥

【Nコード】

N1076BA

【作者名】

黒江念

【あらすじ】

デリート寸前のグレイガとファルザーは幻想郷へとたどり着く。しかし、そこでも暴れて封印されてしまった。一方、現実世界でエグゼ厨の2人が仲良く喧嘩をしていた。

東方獣狼鳥 一話【電腦獣】ヨワクナーイ】（前書き）

電腦獣は弱くありません。
難易度が低いだけなのです。

東方獣狼鳥 一話【電腦獣Ⅱヨワクナーイ】

幻想郷、それは現代から忘れ去られた者達が最後に辿り着く土地。

そこは、人や妖怪、妖精や神など、種族を問わず全てを受け入れる理想郷。

そんな理想郷で その昔、異変が起きた。

遙か昔、この地に 2体の獣が突如として現れ 戦い 暴れ続けた。

1体は鋭い牙を持ち、蒼い狼を想像させる 4つ足の獣………【
グレイガ】

グレイガは その牙で ありとあらゆる物を破壊し続けた。

もう1体は 切り裂く翼を持つ、紅き怪鳥の獣……………【ファルザー】

ファルザーは その翼で この地の全てを切り裂き、吹き飛ばした。

敵対する2体の獣は激しく衝突しあい、その衝撃はこの地を揺るがした。

人々は その恐ろしい力を持つ2体の獣を、畏れを込めて【幻想獣】と呼んだ……………。

「東方暴獣伝、以外と面白かったでしょ？」

「うん、中々面白かったよ！」

「ここは幻想郷にある、妖怪が数多く生息している山。通称、
“妖怪の山”。

そして今、妖怪の山に 鬱蒼と生い茂る木々の中、ただ一軒ある
移動屋台、焼き鳥屋：基、焼き鰻屋の席にて、向かい合い その中
央に本を置いて挟むように会話をしている妖怪の少女が二人いた。

「ねえねえ、その後 その幻想獣って どうなったの？ みすちー
」！

「……ここまで話して 何なんだけどさリグル、あんまり聞かない方が
がいいと思うわよ？」

【みすちー】 と呼ばれた桃色の髪の少女は、罰が悪そうに言う。

しかし、【リグル】と呼ばれた緑色の髪の、やや ボーイッシュな
服装の少女はめげずに期待の眼差しを送っている。

しばらく時間が経ち、みすちーが折れたのか渋々口を開いた。

「…ハア、しょうがないわね…。…後悔しないでね?」

その言葉に、リグルは 続きに期待しながらウンウンと頷いた。

「あの後を簡単に説明するとね、あの スキマ妖怪が幻想獣を倒して魔界に封印したんだってさ…って、やっぱり…」

リグルは 期待を 裏切られあぼーんと している！

「だから聞かない方がいいって……あ、戻った」

「……いや みすちー、期待を裏切りすぎだよ？ 私は 人間と妖怪が力を合わせて……とかを期待してたんだけど、あと内容省きすぎでない？ しかも最後がスキマ妖怪オチ！？」

「しょうがないでしょ…… 私はただ、本の内容を忠実に読んだだけだから。それに、あのスキマがこの幻想郷でそんな事されて黙ってると思う？」

「ん、まあ………」

「あとさ“破壊し続けた”とかって書かれてたけど、実際被害は山一つ分くらいらしいよ……」

リゲルは若干 顔を引き攣らせ、内心 聞かなきゃよかったと思
った。

「あつ！ でもね、この話 実話なんだよ！」

ほら！と、本の裏表紙を見せるみすちー。そこには『稗田阿
の文字が。』

大事な一番最後の字が掠れており読めなかったが、稗田の文字が
あるということには信頼を置ける。

「へえ、稗田のお墨付きか。ん、遙か昔なんだから阿礼とか？」

「あはは、それはどうだろ……ん？ そろそろ夜が明けるわね。
今日は もう店しまっけど良い？」

リゲルは 東の方角を見た。この幻想郷の最東端にある高い山
の上に建てられている【博霊神社】 という神社が朝日に照らされ、
幻想的な 光景を映している。

「…そうだね。じゃあ、また明日？」

「そうね、それじゃ おやすみ〜リグル」

「それじゃ、おやすみ〜」

二人は 簡単な挨拶をし、それぞれの住家に帰って行く。

朝日が夜の闇を追い払う。朝に生きる者は顔をだし、夜に生きる者は帰り行く。

リグルと別れたみすちーは、次に屋台を開店させる場所に移動する途中、ふと空を見上げる。

空は、朝独特の 清々しい青に染まっている。

そんな空の下、みすちーは 一人呟いた。

「東方暴獣伝…、もし幻想獣なんかが 出て来たら………」

その瞬間、みすちーは笑った。それは、妖怪特有の怪しく、狂喜が混じった笑い。

「面白いだろうなあ………」

……現代とは全く違う幻想郷。ここでは常識は非常識となり、非常識は常識となる。

そんな非常識の世界で、これからの未来 起こりゆく異変に 誰も気づく事など出来はしない。

そう、誰にも。

東方獣狼鳥 一話【電脳獣Ⅱヨワクナーイ】（後書き）

誤字、脱字報告、感想等よろしくお願いします。

東方獣狼鳥 二話【発端II 兄弟喧嘩】

ここは現代のとある山奥。

周囲は木々に囲まれ、日光は地面に降り注がずに 地は木の陰で覆われている。

そんな山奥の中、凄まじい殺意を放つ男が二人。

二人は どちらも見た目は何処にでもいそうな高校生で、制服を着用しており 身長は170と言ったところ。

その二人は相手を完全に敵と見なし、互いに相手を睨みつけている。

空気が重い。周囲の木々に止まっていた鳥が一斉に飛び立つ。まるで、その殺気に脅えるように。

その時、片方の男が長時間この空気に浸かっているのに嫌気がさしたのか、口を開いた。

「全くテメエの言ってる事　ワケ分かんねえよ…！」

それにつられたかのように、もう片方の男が口を開いた。

「ハッ、僕もだよ…！」

二人はさらに殺意を放つ。

「何でグレイガなんかを使ってんだよ!!?」

「そっちこそ、なにファルザーなんか使ってるのさ!!?」

どうやらこの二人、ロックマンエグゼ6の電腦獣について口論しているようだ。

本当に恐ろしい。ゲームの話で動物が脅える程の殺意が出せるとは。

「あ”あ”！？ まだワケ分かんねえ事ほざいてんじゃねえ！！
第一、あんなゴスペル（エグゼ2ラスボス）まんまのどこが良いん
だよ！！！！」

「やっぱり兄貴はグレイガの良さをわかってないね！！ あの蒼く
てカツコイイ四つの足から 繰り出される多彩な攻撃が良いんじゃないか！！！！」

二人はこの会話から、兄弟のようである。

おおかたグレイガを語っている方が弟で、ファルザーを語っている方が兄だろう。

「それに設定上、ゴスペルの完全体がグレイガなんだし、昔懐かし
きゴスペルを連想させて『このゲームはまだ終わらない感』を味わ
えるんじゃないか！！」

「逆に『息詰まった感』が出て来んだろ！？ それにエグゼは6で終わっちまっただろうが！！」

「グッ…、それだったら あの紅い鳥の何処がいいのさ！？ 風で飛ばされて、何回やっても何回やっても倒せない あの鳥のどこがあッ！！？」

「…お前、俺が言うのも何だがよ、ファルザーSPの攻撃は全部大振りだからドリームウイルス（エグゼーラスボス）より弱かったりするんだぜ？」

その台詞に、ウグッと喉に言葉を詰まらせた弟に、兄は止めを刺すかのように言葉を投げ掛ける。

「てかフォルテBXをバスターだけ、しかもノーダメージで倒せるお前なら簡単だろ……？」

「チッ……!!」

弟は兄を睨みながら思わず舌打ちをした。その反応にカチンと来た兄はついにしびれを切らした。

「このッ!! とにかく、これ以上グダグダ言っても 始まんねえ!! 対戦だ!!」

「望むところだ!! って 言いたいけどさ、生憎と家にGBAととグレイガ 忘れてきたんだよね!」

「自信ありげに言ってんじゃねえ!! ……まあ、俺もただだよ!!」

この兄弟、息がピッタリだ。

「ならこいつは持ってきてるよなあ？」

「当たり前だよ…！」

そう言って、お互い背負っているリュックを下ろし、そこから取り出したのは リンクPETエクシードとバトルチップ。

バトルチップは、お互い殆ど揃えているのか、リュックにドッサリと入れていた。

エグゼの世界では、PETの中にナビがインストールされており、電子機器にプラグインし ウイルスバスターングをしたり出来る…のだが、それはあくまでアニメやゲームの話。

実際はただの携帯ゲーム機。それでも対戦はできる代物である。

「持ってきてはいるけどさ、兄貴のナビデータチップなんかを僕のPETに入れたくないんだよね……」

しれっと答える弟。いい歳をして何なのであるつか。

「ああ、そうか……。だったらよお……！」

そう言いつと、兄は右手で拳をつくり相手に翳す。

「…だったら何？ 殺る気？」

弟は 兄とは違く、手刀を左手でつくり 構える。

「当たり前だ！！ 今日という今日は、テメエの体にファルザーの全てを刻んでやる……！」

「上等だよ…！ 兄貴みたいな 自分しか見てない馬鹿に、 그레이
ガの良さを思い知らせてやるよ…！」

兄弟喧嘩の幕は開いた。

二人は秒単位で間合いを詰め、拳と手刀をぶつけ合う。拳は手刀
の爪で裂け、手刀の爪は拳により割れる。

「…ッ、やるね…！」

「ハッ… テメエもな…！」

この台詞から、二人は力の面では お互いを認め合っている事が

伺える。

だが…、力は認めても お互いに譲れないものがある。

「ククク、譲れないね…!!」

「ハハッ、譲れねえな…!!」

「ロックマンはあ…!!」

二人は傷付いた手でもう一度拳と手刀をぶつけ合い、周囲の空気を揺るがす。

「絶対にい…!!」

そして、互いに何回も相手の攻撃を受け、のけ反り返りながらも意地で相手を殴り、蹴り、傷付けようとする。

それは お互いの信念を込めた自身の全力。

「グレイガしか……!!」

「ファルザーしか……!!」

「認めないッ……!!」

「認めねえッ……!!」

勢いを付け、重い一撃を相手に食らわす。拳と手刀がまたぶつかり合う。その傷がとても痛々しい。

その時、不思議な事が起こった。一撃がぶつかり合った瞬間、突如として二人の周囲の空間に巨大な亀裂が入る。

そのヒビは二人を中心に大きく入って行き、そして……割れた。

しかし二人は その異常に気を配らない。いや、配れない。

もし、少しでも気を逸らしてしまえば 確実に目の前の敵に葬られる。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「オラアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

……空間のヒビ割れは徐々に周りのありとあらゆる物を吸い込んでゆく。

その”ありとあらゆる物”は二人も例外ではない。

二人は 割れ目に吸い込まれて行く。しかし、互いに傷け合う事を止めない。

それは自分の信念、意思、そして……信じている物を、
信仰している者を否定されたから。

そして、何処かも分からない山から 名前も分からない二人は吸い込まれて行く。

二人を吸い込んだ空間のヒビ割は徐々に閉じて行った。

この現代から、この世界から二人は消えた。

〈魔界最深部〉

ここは光も届かない魔界最の深部。全てが闇に覆われ、些細な光さえも見えない。

そこには大きなクレーターがあり、その中央に2つの巨大な影が二つ、鎖に縛られている。

すると、片方の巨大な影の目の部分と思われる所が突如として怪しく光った。

「…ほう、この信仰の力は……これならば」

巨大な鎖に縛られている鳥の形をした巨大な何かは、一回体をぐいぐいと動かしてみるものの、少し動くだけで鎖を契る事は不可能

だった。

「クツ、流石に この封印を解くには無理か…」

その鳥は 動くのを止め、上を見上げた。

「しかし、この信仰の力が途絶えてしまう前に 何としてもここから出たいものだ…」

俯いて少しためらいを見せる何かだったが、決心がついたのか
すぐに顔を上げた。

「……ならば精神だけでも」

そう言うと、目の光が消え、その直後 体から紅い鳥型の光が出て来る。

「（…この方法は最終手段。もし、幻想郷に行つたとしてもすぐ電脳世界に入らなければ、体から離れた儂の精神は 幻想に取り込まれ消滅してしまうだろう…）」

だが…と続ける紅い鳥。

「（儂を信仰する者が居る…ということとは、それ類いの物を持つている確率が高いな…）」

紅い鳥は一回羽ばたき、高く舞い上がる。その一回で周囲に暴風が巻き起こる。

「ククク…、先に自由を手に入れるのは儂のようだな……グレイガ
！！」

その怪鳥、魔界に封印されし幻想獣：ファルザーは上空で雄叫びを上げると、そこから空間が裂け、その間から消えていった。

もう一体の巨大な影を残して……。

「うおおおおおおおおおおお！！？」

ひゅっ、ドサッ

かなり安い音と共に、空にヒビが入り、そこから何か落ちてきた。

「ッア！？」

男は地面に落ちたが、すぐに跳びはねる様にして立ち上がり、周りを見渡す。

「アイツはッ！！？ ……………ん、ここ何処だ？」

口調からして、兄の方と思われる。

「……………クソッ、迷ったのか？」

「（…さっき居た森とは全然違えな、しかもさっきまで夕方だったのに もう夜かよ？ どうなってんだ？）」

先程まで、太陽は遠く西に沈みつつあったが、今は月が夜空に映

しだされている。

さらに、先程いた森は 探そうと思えば獣道や 山にある民家など、そういつたのを見つげる事は可能だったが、この森は違う。

民家はいくら探してもなく、獣道は異様の一言である。

この獣道、頻繁に通る動物の大きさによって変わるが、自分の知っている獣道の大きさをはるかに越えている。

「なんなんだよ、このデタラメなデカさの獣道はよ…？ 3、4 m
はあるぜ…」

これではただの道だ。どうせ人が手を加えたのだろう、と思った瞬間だった。

「ちんちん」

男は体をビクッと震わせる。

「……………声……………か？ ……不気味だが、アテがねえから行ってみるか……………」

ありえない事だらけで、すっかりビビってしまっている彼であった。

東方獣狼鳥 三話【非常識Ⅱ幻想入り】

声が聞こえた方向に進んで行く兄。しかし、声のした方向に行くにつれ 何故か段々と視界が悪くなって行く。

「…なんだ？ 目が…！？」

そして、やっと声がまともに聞こえてきた。

兄は、恐る恐る木の影から顔を出すようにして 覗いた。

「ちちちーん ちちちーん ちちーんちーんちーんちーんちちちー
ん ちーんちーん」(ジュピター)

「(…声からして女子。…にしても随分ひでえ歌詞だな…まあい
いか)」

すると、木に隠れていたのに気付いたのか その少女が近付いて
くる足音がした。

しかし、今の兄は 何故かよく見えない。普通なら月明かりで見
えるはずが、今は目の前の少女の顔さえ分からない。

「おい、ちょっと」

言いかけた所で、男はその少女から素早く身を引く。

その子から、ここに来るまで全身に嫌と言っほど感じていたものと同じ気を感じた。

次の瞬間

、

ジュンッ

目の前を何かが斬る音が聞こえた。

「イツ!?!」

「ああもう、避けないでよ! お腹空いてるんだから!」

兄はむしろ距離をとる。

「昨日から何も口にしてないからよ!」

「…ひもじい思いしてんだな」

「う、五月蠅い! さっさと私の食事のためにやらねさい!」

夜符「ナイトハウリング」

少女は一枚の札を懐から出すと、高らかに叫んだ。

「ッ!?!? なんだこれ!?!」

視界不良の中、辛うじてだが　その光り輝く弾幕が見えた。

スペルカード

この幻想郷で、遊びとしても　交渉としても使われている　数多くの弾幕の動きを、一枚のカードに組み込んだもの。

そして今、その無数の弾幕が　男を襲う。

「さあーて、どうするの　お兄さん？」

その少女は、目の前の人間を 完全に自分の食物だと思っている。

しかし、人間も負けてはいられない。舐められっぱなしは性に合わない。…が、

「チツ、逃げる」

「…え？」

男は、そう言い残すと猛烈な勢いで今来た道を走って引き返す。

「……………ッあ！？ ちよつと！！」

静粛と、無駄に出された弾幕と 展開についていけず 寂しく取り残された少女ただ一人がこの場に残された。

数分後。

「ぜえ……………ぜえ……………、何だよアレ……………？」

男は逃げた。恐らく2、3kmは軽く走ったただろう。数分間でその距離を走るとは、全くもって将来が楽しみである。

目の異常のせいで、逃げている途中 木に何百回かぶつかり、頭から血がだらだらと垂れている。

「ッ、痛え…、いきなり何なんだあいつ……？」

男は後ろをクルッと振り向き、安全を確認する。あの危険人物は追ってきてはいなかった。

「…フウ、全く 情熱 思想 理念 頭脳 気品 優雅さ 勤勉さ。そして何より速さが足りねえぜあいつ」

全てを言い終わると両手を膝に着き、地面を向いてまた息をぜえぜえとだらしなく切らし始めた。

数十秒もすると息が整い、いつの間にか視界不良も治っていた。

男はまた走り出そうと、顔を上げた。

「ふふふ…、楽しいわね」

「なッ…!?!?」

目の前に、先程 自分を襲おうとした子供と同じ 声を放つ少女
が顔面すれすれの距離にいた。

というよりも、本人がいた。音一つ立たなかった為、男は気
付けなかった。

「さうて、もう逃げられないわよ……！」

少女は、怪しい笑みを浮かべた。

「それに、さっきはよくも散々言ってくれたわね？」

「……クソッ！」

逃げようとしたが無駄だった。いつの間にか、左腕を人間とは思えない力で ガツシリと掴まれていた。

「このッ、放しやがれ!!！」

「暴れないでよ、面倒ね……!!！」

そう言うと少女は爪を男に向けた。その爪はとても鋭く尖っており、長さは10cmを軽く越えている。おそらく、先程はこれで切り掛かって来たのだろう。

「（…ああもう、何なんだよ？ ここ何処だか解んねえし、ガキに

は襲われるし、しかも殺されかけるしよ……）」

「やっと捕まえた……！ ふふふつ、外来人って生でも美味しいのかしらっ。」

そう言うと、少女は背伸びをし男の首筋に噛み付こうとした。首から血を抜き、その後 体の肉だけを美味しくいただくつもりだろう。

「（……クソツ、何なんだよコイツ！？ いきなり飯だの何だの訳わかんねえ言いやがって……！！）」

しかし、男は目を閉じた。こんな人間離れた力に、恐怖したからだ。

「（…訳わかんねえからこそ、納得できねえし気に入らねエ……！
！）」

しかし、目は閉じても諦めてはいない。理解はしても納得はしない。恐いと思っても負けた訳ではない。

「（…そうだ、そうだな……俺は、まだ負けちゃいねえ！！）」

負けない限り、男は何度でも立ち上がる。死なない限り、男は何度でも迎え撃つ。

男は目を開いた。

「残念だったなあ、テメエ!! 俺はまだ負けちゃいねえ!」

「……ハッ、ならどうするつもり?」

「んなこたあ、決まってる!!」

男はキリッとした表情をしながら、彼女を見下すように答えた。

「…助けを呼ぶ!!」(キリッ)

「……………プツ（笑）」

「な、何がおかしい!？」

男は、自分の策が笑われた事に疑問を感じた。純粹に。

「プツ、ククツ……………キツヒヤヒヤヒヤヒヤ!!……………ヒツヒ……………ええ?
いやね…ヒヤハツ……………ここまで追い詰められて…キヒヒツ……………!
た、助けを呼ぶって、クフフ……………」

少女は腹を抱えて笑っている。しかも笑いながら泣いている。

「（笑い方こええ……）……で、でもよ、試してみなきゃ分かんねえぜ！」

男は息を思いっきり吸い込んだ。この現状を打破するため、ここから逃げるため。それをこの台詞に托す。

「誰かアアアアアア！……！ 助けて下さアアアアアアアアアアアアい！……！」

東方獣狼鳥 四話【夜雀Ⅱ発情期】

突如、少女と男の目の前の空間が裂けた。そこから紅い鳥の型をした光が現れ、台風並の風が吹き荒れる。

「なッ!!!?!」

「き、キタ　　。　　。　　!!!」

少女は男から、いや　　紅い鳥から遠ざかった。

「ほら見ろ!!!　　俺の日頃の行いが良いから助け来たじゃねえか!!!」

「うっ…うそ？ (…アレ、この光の形どこかで見たような…?)」

もう忘れていたとは、流石 鳥頭だ。

『早く電腦世界に入らなければ…！ ん？』

その紅い鳥、ファルザーは周囲を見渡すと 男のリュックを凝視した。

「…ん？ なんだ？」

男は自分のリュックも赤く怪しい光を放っているのに気付いた。

「…こいつが光ってたのか？」

そう言って取り出したのは、リンクPETエクシード。

そして、取り出した瞬間、いきなり赤い光はPETの中へと吸い込まれるように入って行った。

『…フウ、まさか、よりによってPETの電腦に入るとはな。皮肉な事だ』

「ッ!? (喋った!? しかもこの紅い鳥……) お前、ももももしかして…ファルザー!？」

『いかにも、儂は電腦獣……ファルザー!!!』

そう言うと、ファルザーはPETの狭苦しい画面の中で おおげさに翼を広げてみせた。

その瞬間、男はPETを自分の頭よりも高く挙げ 土下座した。

「今幼女に襲われてるんだ！ 頼む、力を貸してくれー！」

「よ、幼女ですってえッ!？」

流石に幼女呼ばわりされるのは傷付くらしい。

『…普通は逆だろうに』

「んなことあるかッ!! 俺はあいつに食われそうになったんだ!
! (食事的な意味) あの目を見な! あの目を!」

そう言つとPETの画面を 少女に映るように向けた。

『…成る程、妖怪”夜雀”か。しかも その台詞からすると、奴は発情期のようだな』

「ハアッ!!!??」

見事に 先程まで敵対していた二人の声がフル・シンクロした。

「ちょっと待て!! 発情期ってどういう事だ!？」

『簡単に説明しよう…。夜雀という妖怪は生き物に属される。生き物なら発情期が来るのが当たり前だろう?』

「あ、ああ……」

『それ故に お前を襲ったのだろう。この世界の妖怪はこの世界の人間をむやみに襲ってはいけないのだ』

「まあ……、そうだけど」

彼女はファルザーの言葉に少し同意する。

『それに、お前は外見からして外来人、しかも雄。あの小娘はお前を見て、いてもたってもいらねずに己の欲を抑えられなかったのだらう……』

「…説明お疲れさん」

彼の顔付きが悩み事が消えた様な顔になった。俗に言うへヴン状態という奴だ。

「ちょっと、納得しないで！！ そいつが言ってる事 後半デタラメだからッ！！！」

しかし男と電腦獣は少女そっちのけで全然聞いていない。

「じゃあさ俺、もう少して あの娘に逆し されて、お腹ポッコリさせるト」だったと？」「

『ああそうだ。もしそうなら、あの娘からの”責任をとれ

”の一言で お前は色々不幸な目にあっていたのだ。危機一髪の所を助けた儂に感謝しても罰はあたらんぞ？」

「まあ、今は男が不利な世の中だからな。カンシャノキワミだ」

『ハツハツハ！ これで儂の信仰がUPした！！』

「ちょ……話を」

幼女は 自分の話を 聞いてもらう ために 必死になった。

「しっかし、恐ろしい所だなこは。いきなり”食べさせて(性的な意味で)”とかありえねえぜ……」

『ほう、あの中を？ お前 人間にしてはやるな……この先を考
えると、この人間が一番か……よし決めたぞ』

「？」

『僕の全てを お前にくれてやる……！』

「……テメエも発情期か？」

男はもっていたPETを地面にたたき付け、拳をボキボキ鳴らす。

『……すまない、言葉が足りなさすぎた。僕は今、訳あって精神しか

なく現実に出ると短時間で消滅してしまう』

「…(チツ)OK、話を続けな」

男は拳を掌に戻し、PETを拾い上げる。

『(舌打ちだと!?)…続けるぞ、それでだ お前は俺がインストールされたPETを所持し、ある封印を解きに行つて貰いたい』

「…見返りは? それともし、断つたら?」

『もし断つたりしたら、お前は間違いなくこの場で殺されるだろう』

「…だろうな。あと、その俺を殺そうとしてる弾幕がこっちに迫って来てるぜ？」

『それなら心配するな…！ 俺がお前の体を電子に分解し、その電子体に俺がインストール……。そしてお前一人でも十分戦えるようにしてやる…！ それが見返りだッ…！』

「そ、そいつはつまり…！」

『ほう、察しが良いな…。ああそうだ……ビーストアウト 獣化をさせるつもりだ！』

「……………クククッ！！ そいつは最高じゃねえか…！！」

弾幕は前方5m程前までに迫ってきていた。

『…決心は付いたか？ では行くぞ…！ 適当なナビデータチップをPETに入れる！ それを今から“獣化チップ（ビーストアウトチップ）”にする…！』

「ハッ…！ やってやるよ…！」

男はナビデータチップ、『ロックマン』をスロットインした。

『よし、インストール開始……………完了！！ 後はそれを再度スロットインだ…！！』

「ケッ、言われなくても… 獣化チップ ファルザー！！ スロットイン…！！」

ピロリン と、機械音が鳴った。

それと同時に男の体が、ゲームでロックマンが獣化するように蒼い炎に包まれた。

すると、男の身長が150cmほどまでに縮んだ。

足には鋭く巨大な爪。

胸から肩にかけては鳥の体毛を連想させる茶色のアーマー。

手の爪は鋭く尖り、頭はまるで髪が風で靡いたように後ろに突き出ている。

そして、……………巨大な翼。

その体は、殆どが紅の色に染まっていた。

そう、これが

「……………獣化『ファルザービースト』!!」

東方獣狼鳥 五話【ファルザーⅡビースト】

「な、何よアレ!!?」

ファルザービーストとなった男を見て、今まで一人と一匹に忘れられていた少女は咳く。

「バトルチップ、ガッツパンチ!!」

ガッツパンチ

自らの拳を巨大化させ、相手を殴りつける漢らしいチップ

男は、いや ファルザービーストは、そう言つと翼を羽ばたかせ
て飛び上がり 拳を自分の体以上の大きさに変型させ、目の前の弾

幕に向かい殴りかかった。

その一撃はとても重く、殴られた弾幕は掻き消される。

『ほう…、チップの使い方は まだ教えてないのだが？』

「叫んだら使える気がした！」

『…ふう、いいか？ 効果、攻撃方法がイメージできるチップは獣化している時に好きなタイミングで使えるが どちらか片方でも分からないチップは使えん』

「オウ！ サンキュー！！！」

『それと、ギガクラスチップは絶対に使うな。お前の状態を保ち、重力操作だけで精一杯なのだ。演算が間に合わん』

「あいよ！！！！」

ファルザービーストは、喋り終わると同時に弾幕を全て潰し終えた。

…いや、まだだ。残っている者がいる。

弾幕を出した張本人、夜雀の少女。

男は、少女に超高速で接近する。ファルザービーストが通過した後は、烈風が巻き起こり 全てを吹き飛ばす。まるで、空間そのものが切り刻まれているようだ。

その姿は、切り裂く翼。

「あの、えっと……ごめんなさいっ！」

少女はお辞儀をしながら謝罪を述べた。ご丁寧に直角90度に礼をした。それが幸いし、ファルザービーストの直撃を避けた。一方、彼はと言つと……

ヒューン、ドゴッ

「ぐあッ!!!?!?」

少女の後ろの木から、安っぽい音が聞こえた。

少女はすぐに後ろの木で伸びている彼の元へ駆け付けた。

「うげええ……」

「えーっと、大丈夫？」

「…に見えるかよ？ うぐっ…、変なトコ打った…」

「ご、ゴメンって言うてるでしょ！？ それに貴方だって悪いのよ
！！」

「何でだよ!？」

「何でって、私と同じ夜雀のくせに 妖力隠して人間に変装してる
から…!!」

「どうやら彼女は、獣化状態の男を夜雀と勘違いしてしまったらしい。勿論、男は立ち上がり反論しようとした。が……、」

「何言つてやがる!?! 俺は人げ!..」

「でも、その姿でも妖力が全然…、てことは もしかして貴方、妖怪になつて日が浅い?」

「だからよ…!」

「もしかして、私の方が夜雀として先輩?」

少女は小さく「よっしゃ!」と、ガッツポーズをとった。

「いや、だからね…!」

「じゃあ、同じ夜雀なんだから気軽に『先輩』って呼んでね!..!」

「話をよ……」

「んー、でも危ない目にあわせちゃったし、先輩として鰻井でもおごっちゃわよー!」

と、少女は親指を立ててウィンクした。

「聞けよ……」

男とは、どの世界でも立場的に弱い生き物である。それを、今日改めて思い知らされた彼である。

「ああ、自己紹介が遅れたわね。私はミステリア・ローレイ、みすちー先輩って呼んでねッ!」

そして少女、みすちーは先程とは違う純粋な笑顔を少年に送った。

「(…よく見りゃ中々可愛いじゃねえか…)(…あー、俺の名前は
ファル夫】、よろしくな」

「へえ、よろしくね ファル夫！」

「お、おう(…抱きしめたいな)」

と、変な事を考えていると 腕をガシッと掴まれる。

「それじゃ いきましょー!」

「え? どーに?」

「私の屋台よ。さっきも言ったでしょ、鰻井おじつてあげるって!」

そうして、みすちーは またファル夫に笑顔を見せた。

「お、おうッ！ よし、早く 行こうぜッ！！」

するとファル夫は、率先して飛んで行く。

「あ、ちょっと そっちじゃないって！ ……ふふっ、もう！」

みすちーは、ファル夫より 速い速度で飛んで行き追い越す。

彼も負けじと 急いで飛ぶが、飛び方に慣れておらず みすちーに速度で負けている。

その二人が夜空を飛ぶ光景は、どこことなく微笑ましく また、初々しいものであった。

今宵、月明かりで地が照らされし夜、幻想郷にいる夜雀に変わった後輩ができた。

東方獣狼鳥 六話【触手】素晴らしい】

〽一時間程前、妖怪の山 河原〽

ひゅー、ほちゅん。

ド
ド
ド

「ほぶほぶッ！！？」

綺麗な月が浮かんでいる夜空から、流れが少々急な川に人が落ち
てきた。

「ッ！！ ぶはッ！！」

水面から顔を出した少年は、落ちた拍子に川底の石に頭を強打してしまったらしく、頭からだらだらと血を流している。

「ゲホツ、ゲホツ……………」

「うゝ…寒…クシユン！」

川から上がった少年は、河原の石の上で見を震わせている。ここには生憎と、火を起こす物がないので、大人しく座り込んでいる。幸い、落ちてきた場所は深さ2mもなく、川岸にも近かった。

「うわ…手の傷に染みるし、ここ何処だか分かんないし、頭痛いし…寒いし最悪だよ……」

口調からして弟のようである。

〜数分後〜

「……く〜か〜……」

少年は眠り込んでしまった。おそらくは先程の喧嘩で体力を消耗したからだろう。

しかし、この山をただの山と思ってはいけない。……「ここは”妖怪の山”なのだから。

ガサツ、ガサツ

突然、河原の近くの茂みを掻き分けて何かがやってくる。

スタスタと足音は 少年の方に向かって来る。

そして、足音が止まった。その足音の主は少年を見下ろす。そしてそれは少年に咳いた。

「何故、人間がこんな所に………?」

その足音の主、小柄な体型とは釣り合わない大剣を背負った、銀髪で犬耳の少女【犬走椀^{いぬほしりもみじ}】は戸惑っていた。

何故 人間が妖怪の行動が活発な時間の夜に、しかもすやすやと眠っているのか。

本来なら不法侵入として追いつ返す、もしくはその場でバツサリ…もあるのだが 生憎と本人は寝ているため、少しばかり情が湧く。

なので椀は前者の 追いつ返すことにした。

く妖怪の山 山中く

「ハア…、なんで私が人間なんかに……………」

椛は少年を背負い、自分の大剣を腰に下げて山を下りている。衿元でも掴み そのまま飛んで下りるといふ手もある。

が、人間を掴んで飛行している所を もし情報通な上司や同僚に見られてもしたら、捏造された記事を書かれ兼ねない。

故に 目立たないよう歩いて移動している。

「（この人間、服装からして外来人… ならば夜明けを待ち 博麗の巫女の下に行って頼むべきだったでしょうか…？）」

などと考えているその時、近くの茂みからドスン、ドスンと、重い何かがこちらに近付いて来る足音がした。

「…ッ!？」

彼女はとっさに身構えた。その音は段々と大きくなりつつある。杖の能力【千里先まで見通す程度の能力】も、視力が千里先を見通せる程になるだけで、障害物を無視しての透視する能力ではない。

故に草むらの向こう側を見ることは出来ない。

しかしこれだけは分かる。何か重く、巨大なものが近付いてくる。

そして、音が止むと同時に、その巨大な何かが出て来た。

『ニンゲン……、ニンゲン……』

その草むらから出て来たのは、2、3m程の肉塊に手足が生え、それ全体が巨大な顔になっている、まさに言葉通りの化け物だった。しかも、凄まじい腐臭を放っている。

その様な物が喋っている所を見ると妖怪の類であることが分かる。

「うげッ!？」

その臭いを嗅いだ椀は、らしからぬ声を上げ、急いで鼻を袖で隠し口で息をした。

それもそのはず。椀は狼の妖怪で、嗅覚は人間の倍以上はあるのだから、人間でも臭いと思う腐臭を嗅がせるのは、下手をすると失神してしまうかもしれないからだ。

「(うぐっ…、あれはぬっぺっぽう!?)」

ぬっぺっぽう

人間の死肉の固まった物に、自然界の妖力が吸い込まれて形を成した者。地方によってはぬっぺふほふとも。

一瞬の出来事であった。

椀はぬっぺっぽうを縦に一閃し、真っ二つに斬った。

「ふう……」

椀は ため息を漏らし大剣を背負う。

先程男を投げた所に行こうとし 後ろを振り向いたその時

「ひゃっしん!？」

ヌルリと何かが椀の臍を撫でた。

椀は、その何かの体液でまだヌメヌメしている足元をゆっくりとみた。

「こ、これは…?」

それは、椀の腕ほどはある異常な太さを持ち、筋肉繊維でできたミミズのような奇妙な生物だった。

そしてそれは、太さに比例しているかのように異常に長かった。

椀は不思議に思い、先程椀の臍に触れたヌルヌルしているミミズ
の頭のようなところを、思わずガツシリと掴んでしまった。

それは掴むとビクンビクンと頭と思われる先端部分を上下させ暴
れる。

「ふんッ!」

椀は粘液で掴みづらかったのか反射的に思いきり力を入れてしま
った。

するとそのミミズは、椀の握力であっけなく粉砕してしまった。

「……あッ」

そのミミズの頭は契れると椀の足元に転がり落ちる。

しかし、椀は先程から気になっていた。

これはいったいどこまで続いているのだろうか？

椀はその気持ち悪いミミズを目でたどってみた。

その先には、先程真つ二つにしたぬっぺっぼうの切り口から、ついで先程見たミミズのような生物……基、触手が無数にうねうねとしながら生えていた。

すると、やけに ふとましい一本の触手が椀の下半身に近寄ってくる。

椀はとても嫌な予感がした。

「（え、嘘……？ 普通こういつのって…！？）」

椀は顔を青ざめた。振りほどこうとし、どんなに力をいれたがこつもヌルヌルしていると力は意味を成してはくれない。

さらにそんな椀に追い撃ちをかけるべく、触手がもう一本 椀の後ろから迫ってきた。

「ちょっと いらナイッ！ そんなモノ、二本も……！！」

ちなみに、椀は数百年生きてはいるが、いまだに清い存在である。

このようなモノでハジメテを失うのは、悲惨などという言葉では
すまされないであろう。

二本の触手は無慈悲にも椀に近付き、ついには腿まできた。

「ひっ……………」

そのヌルヌルがまた恐ろしく感じる。

「い、嫌……………」

ついに、彼女の下着に触手がきた。

一人の男が覚醒した。

東方獣狼鳥 七話【弟「覚醒」】

「フラグッ！……！！……！！……！！……！！……！！」

椀の上げた悲鳴よりも、より大きな声に驚いた触手は そのいやらしい動きをピタッと止めた。

その声を上げた人物、それは先程まで眠りこけていた男であった。

椀はもうヤケになった。

もう、でっちあげの捏造記事に晒されるのがなんだ。

この一件でどんなように同僚達に馬鹿にされても構わない。

自分の貞操が最優先。

椀は、もう迷わなかった。

「すいませんッ！！ 助けを呼んできてくれませんか大至急でッ！！」

「じめん、もじちゅっ」と

椀の希望は、簡単に断ち切られた。

男は触手に捕らえられている椀を凝視している。助ける気は更々ないであろう。

そして椛が身動き一つできない事を良いことに、
男はそのハレンチな状態の彼女を360°なめまわすように視姦す
る。

彼女は恥ずかしさで目から涙がうつすらと流れる。

椛は穴があつたらさらに深く掘って潜りたいと思った。

「ハア…、ハア…。たまらないよ。最高だよ……そつだ、後ろ姿は
どんなかんじかな？」

男は幻想郷だからこそセーフなテンションで息をハアハア荒くし

ながら、まだ見ていない椛の後ろを見に歩きながら移動する。

「……………死にたい」

こんな事になるのなら、あの男をいつそあそこで殺ってあげれば良かったと心底思う椛であった。

「しかもこんなコスプレ美少女がだなんてウフフフフ……………うわっ！？　なんだこれッ！！？」

男は椛にばかり気をとられ、触手のことは気にも止めていなかった。

男は触手にぶつかった。その瞬間

「ちょっと、放せこのッ！！」

哀れ。男は触手にぶつかった途端に、搦め捕られてしまった。

「……………ごまあないですね（ボソッ）」

権は男をジト目で見ながらボソッと呟いた。

「聞こえてるよ」

「ごまあないですね」

「はっきりいってことないでしょ？ トドいよ君。へこんだよ」

男は触手に頬をプニプニされながらもツッコミを入れる。

「うわ、くっせ……。これ何できてるの？」

「死体の肉ですよ」

「へえー」

男はそう言いながら、近くにある触手を前のめりでペロッと舌で舐める。

というより この二人、順応性バツゲンである。

「…ペツ、ホントだ。変な味がす
」

男が触手から顔をはなすと

なぜか男が舐めた触手が顔(?)を赤らめさせていた。

「え、何これ怖い」

その触手は、男へ スリスリ擦り寄る。

まるで親に甘える子供である。

それにつられるかのように、杖を拘束している触手も含め、いっせいに男へ纏わり付く。

「君らなにすつぶおわッやめ」

男は無数の触手に覆われ見えなくなり、その断末魔は触手によって掻き消された。

「へあ……、ああ……」

杖は触手から解放されると、腰が抜けたのかへナへナと力無く地面に座り込む。

もしあれが自分だったら…、そんな悍ましい想像の恐怖で身震いした。

(やば…息が)

触手にぐるぐると巻かれ、ミイラのようになっている中、彼は抗っていた。

触手一本一本の粘液で空気が塞がれ、男はビニール袋の中で呼吸をしているような状態であった。

(…チツ、酸欠かな…？ 頭クラクラするよ………)

やばいかも

男の頭の中で、警報が鳴り響く。

(なんだよ…、せつかく この世に舞い降りた天使(椀)に出会えたのに………)

こんなところだ

終わる？

いやだ、そんな事は。

男は酸欠状態でありながら、必死で体をくねらせてもがき脱出をはかる。

…が、やはり無駄だった。体はヌルヌルし、ただ空回りするだけだった。

いくら粘液で滑りやすくなっているとはいえ、触手そのものの力が悍ましい程に強く、隙間を作る事さえままならない。

意識が朦朧としてきた。どうやら先程もがいたせいで力を使いきってしまったようだ。

(……ちきちょう)

とうとう力が入らなくなった。男は眠るようになつたりと俯き目を閉じる。

(……僕は……)

意識が段々と遠のいて行く。

(僕はね……………)

まじとめの娘をよ

男の意識はここで途切れた。

〈同時刻、魔界最深部〉

突如、あの時 取り残された巨大な狼から蒼い光が出てくる。

そしてそれは、目の輝きを失った怪鳥の周りをクルクル回る。

まるでそれを調べているかのようだ。

『クソツッ！！ あのアホ鳥の精神データだけ消えてやがる！！』

蒼い光の若々しい男の声は、虚しくも暗い闇の中へと消えて行く。

『…チツ、こりゃあ俺様も もたついてる暇はねえってことかよッ
………！?』

その蒼い光は狼の姿へと形を変える。

『首洗って待ってやがれよ……、ファルザー!!!!!!!!!!』

巨大な狼……、グレイガは咆哮を轟かせる。

するとファルザーが空間を切り裂いたように、グレイガは空間を歪め、自身が通れる程の大穴をあける。

そしてその四股を駆使し、巨大に似つかわぬスピードで穴に入っていく。

グレイガが通ると、直ぐに穴は塞がった。

この空間には、巨大な獣の影二つが取り残された。

く妖怪の山く

「クッ、このオツ……!!」

あの男が触手に埋もれてから、もう10分が過ぎようとしていた。

あれから椀は立ち直り、大剣で男を絡めている触手を斬ろうとしているが、剣の刃でさえ粘液が触手を守り、無傷であった。

「打つ手無しか……!？」

椀が触手から距離を置いて体勢を立て直し、自分の試作段階のス

男を捕らえていた触手も その雄叫びに気圧されたのか、男から
シュルシュルと離れて行った。

「…随分幸せそうな顔で触手しゃぶってますね」

触手から解放され、地面に横たわっている男を、まるでゴミを見るような目を見た。

ちなみに男がしゃぶっている触手……、これは先程男が舐めて懐いた触手である。

他の触手と本体であるぬっぺっぽっは、さっきの巨大な獣の咆哮に怯えたのか、ずるずると自身を引きずりながら山の奥へと消えて

いった。

しかし、この触手は男の傍に居たいらしく、自らを10cm程度にちぎって男の口の中でごくめいている。

なんとこの事だろう。自分からならば簡単にちぎれるなんて。

そう言えば、光はあの変態に向かって消えて行ったような……？

「ウブブ…、あえいおがういあるあいおえおあん…」（ウフフ…、
激しいのが好きなのかい子猫ちゃん）「

男の台詞にゾワツとした。生理的に無理だ。

「貴様、いい加減に起きろッ！！！」

「げぶうッ！！？（ゴクッ）」

寝ている男のアゴをアッパーカットした。男は高さ5mほどのア
ーチを描き、地面に2回バウンドし 最後は頭から落ちた。流石、
霊力を操れる妖怪の力だ。

飛ばした拍子に男が何かを飲み込む音が聞こえた。知るかそんな
こと。

これで男が死んだらさっきの妖怪にでも喰わせてやる。というか
意地でもぶっこ

「いつつう〜!! ってあれ……? キスの途中じゃ……なかつた……?」

死んでいなかった。無傷だった。絶望した。こいつ本当に人間か?

「おお君はッ!!! 無事だったん」

「寄るな」

「どうふうッ!!!?」

今度は一瞬で懐に入って腹を蹴りとばしてやった。今のがあの時見捨てられそうになった私の分だ。

以前夜警をしていたとき、10人程の筋肉モリモリマツチヨマンの変態共に囲まれて襲われたが、軽く蹴りを腹に喰らわせてやつただけでそいつらは二度と動く事はなかった。

そんな私の強すぎる蹴り（キリッ　ならば、今度こそ

「…ケホッ、ケホッ、ウッフ…。気持ち良いよ……ッ……！」

死を与えるつもりだったが快楽を与えてしまった。

もう気持ち悪さを通り越して怖くなってきた。

ジリジリと男が私に近寄ってくる。私は一歩ずつ後退する。

「ウッフッフ……！」

「……くっ……！」

男が出すオーラが半端ではない。何処へ逃げても絶対に追いつかれそう。私、白狼天狗なのに。

男が両手を大きく広げる。まるでこっちきなよと誘っているようだった。

正直、こんな男に抱きしめられるくらいならさっき襲ってきた触手をくわえた方がましだ。

私は腰にかけている剣を握った。

「はあッ!?!?!」

「あひよおん」

やる気のない声と共に避けられてしまった。畜生。私が日々怠らずやってる剣技の訓練はいつたい何だったのだろう。

「ウフフフフ、大胆だね」

「沈めッ！！！！」

「があッ！！！！??」

今度は顔面に拳をいれた。2mは飛んだ。殴った瞬間、男の顔が一瞬幸せそうに見えた。

……そういえば、何か物凄いのを忘れているような気がする。この男以外で。

東方獣狼鳥 九話【グレイガ「ビースト」】

椀に吹っ飛ばされた男はとても幸せだった。

「ウフフ…、まさかあんなカワイイ娘に殴られるなんて…//」

恐らく椀がこの台詞を聞いたとしたら、さらなる追撃が待っていたであろうが、幸いにも本人の耳には届いていなかった。

『…おい』

「……ん？」

突如、若々しい男の声が聞こえた気がし、彼は倒れた体を起こし
辺りをキョロキョロと見渡す。

「（あれ、さっき男の人の声が…？）」

『…おい！』

先程よりやや強めの声音で呼ぶ声があった。

「（…まさかね）」

男は椀の方を見る。すると椀はギロリとこちらを睨み返した。

「やっぱり違うよね…」

『…おいッ！！　ここだここ！　リュックの中だ！！』

「え！？　リュック！？」

男は自分が背負っているリュックを下ろし、ガサゴソとバトルチップを掻き分ける。

すると、リュックの奥底にあるリンクPETEXが蒼く光っているのに気付き、拾い上げる。

「うわッ！？　なにこれ…」

『おおッ！！！　久しぶりのシャバだぜ！！』

そのPETはいつもの待機画面ではなく、自分が最も憧れているヤツがいた。

それは頭に5つの鬣があり、まるでライオンのような頭である。そして狼のようなしなやかな体。

その巨体を支える四本の脚は、まさに逞しいという言葉が相応しいと言えるもの。

尻尾の先は鋭く、武器のようだ。

「…君、グレイガ？」

『おうよ！ その様子だとテメエが俺様を信仰してる人間だな？』

「信仰っていうか…、君のファンってところかな？」

『一応それも信仰の一種だ』

「へえー」

男は別に、これといった違和感は持っていなかった。

まさにこの喋り方、この雰囲気、自分が持っている【破壊する牙】のイメージにピッタリだ。

『へえーってお前…、ん？ おい人間、向こうにいる女のトコ行け』

「え、いきなり何？ それに多分む」

『いいから行けって』

「（無理だつて……）」

男は言われるがまま楯に近寄った。

しかし、ヒュン と彼女が剣を振り、男の鼻先を掠った。

「これ以上近付くな……。殺すぞ？」

「…ほらね？」

『オメエ 一体あいつに何したんだよ…？ まあいいか テメエ だけでも。 女の方は多分もう気付いてやがる』

男は首を傾げる。 何に気付いているのだろうか。

『テメエ気付いてねえだろうが、あのウネウネしてるキメエのまだ近くにいますぜ?』

「えッ!?!」

「…一体誰と話しているんだ貴様は?」

「あ…いや独り言だよ。(この人雰囲気変わってない?)」

彼女の口調を変える原因を無意識にも作ってしまったこの男が気付く事など、到底出来る訳がなかった。

「んで…何で分かるの?」

『電腦獣ナメんなよ? それよりもそいつ、今でも殺気だだもれで

「こっち見てっから。おっと、怪しまれるよつなことすんなよ」

「…じゃあどつするのさ？ このままじゃ教われちゃうよ？」

『安心しな、俺がテメエを戦えるようにしてやつからよ！』

「えっ、どついっ」

「五月蠅いッ！！ 貴様いい加減にしろッ！！！」

「あぐおッ！！…？」

今度は鳩尾に膝蹴りをされた。無意識のうちに声が大きくなって
いたようだ。

（ 電脳獣説明中 ）

「 ……成る程、簡単に言えば封印解くまで君は僕のPETで居候+戦いの補佐ってことなんだね 」

『 ああ、そんなトコだな 』

説明を聞き終えた男は 心の準備 …… と深呼吸を1回、2回とする。

「 ……さて、早速だけどもやってみようか！ 」

『 ……おっ！ 』

「…今度は何処を蹴り飛ばしてやるのか？ こっちは神経使っているというのに……」

一人距離をおき、向こうにいる人間が凄まじい独り言でギャーギャー喚いているようにしか見えていない椀であった。

『そんじゃあ、やっちないなッ！！』

「えと、確か……」

男はナビデータチップ、ロックマンをPETに差し込む。

『…OK、インストール完了だ。』

「そしてこれをもう一回つと…」

ピロリン、と電子音が鳴る。それと同時にPETから青い炎が出てきて、男の体を包みこんだ。

手が

脚が

体が

頭が

男を飲み込んだ炎は、包みこんで一秒足らずで消えてしまった。

しかし、男が炎から出てくると彼は人間の形をしてはいなかった。

脚は大地を力強く蹴るために肥大。さらに鋭い爪が生えている。

腰あたりからはグレイガの凶悪な尻尾が。

指先は鋭く尖り、腕からは鉤爪状のアーマー。

胴体には蒼いアーマーが、肩には爪跡のような白いアーマーがそれぞれ装着されている。

そして、頭はグレイガのように5つの鬘が造られ、バイザーからは先程の男の物とは思えない、鋭い眼光を放っている。

そう、これが

「…獣化『グレイガビースト』ッ!!!!!!!!!!!!!!」

「…凄い、ホントになれた」

『半信半疑だったのかよ…』

「ッ！？ 何事だっ!？」

一人 遠くで様子を見ていた椛は、男の変身に驚いた。

「えーと、話せば長くなるような…」

『んなことよりよお、後ろの方見てみな』

グレイガビーストは、言われた通りに後ろの森を見遣る。

「ッ!? 一体何処から声が…!?」

「(…なんかウルさいねこの娘)」

『(ああ、まったくだ)』

男は、そう言いつつも ジッと暗い木々の中を見つめる。

…すると暗がり、先程の触手の化け物…ぬっぺっぽうが物陰に
ひっそりと隠れているのが見えた。

「ちょ、あそこになんかいた!? ……というか視力が物凄いことにな
ってる!?!」

『ああそうさ。それに、その気になりゃ嗅覚も上げれる………が、今
は止めた方がいいな』

「何で？」

『…あの女見てみ』

GBは椀を見やる。彼女は目を閉じ、精神を集中させて何かを探しているように見える。

「あの娘がどうかした？」

『あいつぁ白狼天狗っつー妖怪でな、目と鼻が効くんだよ。あいつ長い時間くっせー肉塊と殺りあって嗅覚マヒってやがる』

「それはご苦労さんだね……」

『だから気配で探し出す集中しなきゃ 見つけれねーんだらうつよ。』

ま、俺様は あいつら以上に目が良いから見えんだぜ』

まあテメエも鼻やられたきゃ…、と続けるグレイガに 男は遠慮
しますと引き下がる。

「…んでき、これからどうするの？」

『ああ？ 決まってるんだろ？ 向こうはこっち殺す気だぜ？』

「…やられるよりやった方がマシってね」

GBの目が大きく見開かれる。

『わかってんじゃないか。んじゃないよお……』

「……行「っかッ!」」

GBは向「っ」に「い」るぬっ「ッ」ぽっ「ッ」目掛け、一直線に走り出した。

「（……やかましい）」

椀は目を閉じたまま精神を集中させ、肉塊を探し出そうとしている。

「（近くにいるのは分かるのだが、こっも暗くては私の視力でも具

体的な場所が……)」

眉間にシワを寄せ、今はあてにならない嗅覚を、そして視覚を遮断。そしてその分を第六感へとまわす。

「……しかしあの男が装備してる狼のような鎧、かっこよかつ……
……いかにいかに……)」

椀は目を深くつぶり、再度集中する。

「……アレ、ちょっと着てみたいかも」

危ない趣味に行きそうな椀であった。

東方獣狼鳥 一零話【暴力】程々に】

「（ちよ、凄い速いッ!?!）」

男は今、とても驚いていた。なぜなら 自分が走っている速度が尋常ではないからだ。

例えるならば…、現代世界にある自動車。それを軽く越えているスピード。

『こんな事で驚いてんじゃねえよ。後ろ見な』

男が驚いているのを悟ったグレイガは彼に話しかける。そして男は後ろをチラッと振り向いた。すると……

「後ろ…?」

そこには、自分の通った後にクッキリと自分の残像が残っていた。

「うわッ!? 凄いな…」

残像は数秒立つとすぐに消える。

『どうだスゲーだろ?』

「あはははは! 面白いねこれ!」

男は化け物そっちのけで、その場を物凄い速さでグルグルと回り、残像で遊び始める。

『馬鹿野郎ッ! んなことしてる場合かッ!? あっちは俺らの事

は気付いて……ツチ、もう来やがった……」

「？」

急に、月明かりで照らされているグレイガビーストの周りが暗くなる。彼は上を見上げた。

「グルルルル……」

そこには よだれをダラダラと垂らし、仁王立ちしているぬっぺっぽうがいた。

ぬっぺっぽうは再生したらしく、触手状態から肉塊に戻っていた。

「……あはははは、こいつって僕らを襲ってきた……アレなの？」

男はぬっぺっぽうが肉塊だった時には眠っており、この化け物が

『テメエ、大丈夫かッ！！？』

グレイガは男に呼び掛ける。：しかし、男の反応がない。

『おい………、おいッ！！！！　しっかりしろッ！！！！（…クソッ、人選ミスったか？）』

などと、グレイガが薄情な事を考えたその時であった。

「……………チツ、グレイガ」

『おおッ！！ 生きてたか！！ 俺は信じてたぜ！！！！』

男は自分に倒れている木を、片手で退かしながら起き上がった喋った。

どうやら力や体の耐久性も獣化により強化されているようだ。

「どっつてもいいよ。そんなこと」

『……どうしたテメエ？　どっか変なトコ打ったか？』

グレイガは、男の雰囲気は少々変わっているのに気付いた。

『……だからといって、そんなこと。それより僕の質問に答えてね』

『ん、ああ……』

ぬっぺっぽっは、こっ喋っている間もドシン、ドシン　と歩みよ
ってくる。

先程の一撃で、この獲物ならば狩れるとでも確信したのだろうか。

「……ごういう化け物ならさ、殺しても誰も文句言わないよね？」

男はとぎれとぎれに言葉を並べる。

『…さあな、でも人間ならむしろ喜ぶんじゃない？ 「危険な妖
怪殺してくれてありがとう」ってよ』

「…そっか、そうだね」

『お前、ホントにどうした…？』

グレイガは男の身を案じ、周囲への警戒心が薄くなっていた。

そして、グレイガが気付かない間にも肉塊はもう目の前まで迫っていた。

ぬっぺっぽうは、止めといわんばかりに口を大きく開け、GBを丸呑みにしようとした。

『ッ！？ おいッ、逃げろッ！！！！！！！！』

「…ねえ、君を」

ドスン

「グルルルルウ!!!??」

一瞬で、大口を開けたぬっぺっぽうのアゴをGBが思い切り殴り飛ばした。

「…君のせいだし、なんかスイッチ入っちゃったよ。責任、とってよぬ…」

グレイガビーストは、高さ3m程もある肉塊の倍の高さを一瞬で飛び上がる。

「バトルチップ、アクアニードル」

突如として、何処からともなく現れた水を帯びているトゲがぬっぺっぽうの額に刺さった。

「グルウツ!!?!」

化け物は、今の一瞬に何がおこったのか理解できていないようだった。

アクアニードル

何処からでも攻撃可能な不意を突けるバトルチップ。しかし、ヒットまで少々時間がかかるため速い敵には向かない。

「まだだよ。ファイアパンチ、トリプルスロットイン」

男がそう唱えると、男の腕が赤く巨大な……、ぬっぺっぽっの体と同じくらいの大きさの拳となる。

「プログラムアドバンス…、フレイムナックルッ！」

フレイムナックル

己の拳を熱で巨大化させ、相手に放つ技。一撃のダメージが大きい。遠隔操作可能。

グレイガビーストは空中で拳をぬっぺっぽっへと放つ。そしてぬっぺっぽっは2つの拳に押し潰された。

「グウギユウウウウウウウウッ！！！！??」

「ハハッ、いいザマ……」

彼はストつと地面に着地する。男の腕は再構成され元に戻り、肉塊はミチミチと音を立てて巨大な拳に段々と潰される。

『…なんだかんだで戦いのセンスはあるな』

グレイガは思った。第一印象は変態で、出来れば近寄らないで欲しい。そんな人間だった。

だが、今は違う。戦いを楽しい遊びとしてやっている。そんな人間に見える。

「さあ、最後行くよ」

「グルウツ!？」

拳に挟まれ身動き一つ出来ないぬっぺっぽっに、男はフレイムナツクルを遠隔操作した。

「ソイツ空高く上げて」

その命令を出した瞬間、拳はぬっぺっぽっを空高く持ち上げて行く。

「…だいたい、このくらいがちょうどいいかな?」

地上から20m程離れた上空に、ぬっぺっぽっは上げられた。

「グルッ、グルアアアッ!!?」

「聞こえない聞こえない」

男は軽いノリで空を見上げる。すると構えてスウ…と息を吸い込む。

そして男が息を吐くと、彼の口からは灼熱の炎が勢い良く吐き、ぬっぺっぽっを業火で包み火だるまにした。

「グルッ!? グルルルウッ!!!??」

グレイガファイア

グレイガが使う炎系の技。攻撃範囲が広く、ウルトラ上手に焼ける。ちなみに名称は炎プレスだったり。

この約20mもある距離を、火の勢いを殺さず 尚 生きている肉を焼く程の火力、それはとてつもない熱を帯びている。

…その熱は、まだ目をつぶっていた彼女の所まで伝わった。

「あ、熱ッ!?! 一体何だ……ッ!?!?」

桜は目を開き、今自分の周りがどうなっているのかを確認した。

ぬっぺっぽうは巨大な拳に空高く上げられ、男が炎を吹き肉を炙っていた。

「グルルルル……ッ!?!」

辺りが肉の焦げる臭いで満たされる。ぬっぺっぽうはもがき、フ

レィムナツクルを振りほどこうとするが ガツシリと捕まれており
身動き一つ出来ない。

「グルッ…、グルッア……！」

ぬっぺっぽうは肉が段々と黒く焦げ、空中からボロボロと燃えカ
スが落ちてくる。

「そろそろいつかな…？」

グレイガビーストはフレイムナツクルを解除し、青いデータに分
解し消す。すると巨大な拳に捕まれていた肉塊は支えをなくし

ドスン と大きな音と共に肉塊が落ちてきた。

焦げた肉の塊は、落ちると同時に、残りのカスもボロボロと風に流されて行く。

「…ふう、終わった終わった！」

グレイガビーストはクルッと椀の方を振り向き、背伸びをした。

東方獣狼鳥 一一話【狼Ⅱクンカクンカ】

男はツカツカと椀へ歩み寄ってくる。

椀はとっさに構えるが、その構えは無意味に終わった。

「ねえ見た見たッ!? さっきの僕やったんだよ!」

『おっ、さっきまでのテンションに戻った』

男が自分に危害を加えない事を確信した椀は警戒を解く。

「……………何者なの、この男?」

椛は素の喋り方で思った。自分が運んだのは人間ではなく、変化出来る妖怪だったのか？

それにしては随分人間じみていたような気がする。

「さっきの戦い方どうだったグレイガ？」

「…そうだった、隙作りすぎなんだよ この馬鹿！！ ったくヒヤヒヤしたぜ…。でもまあ、最初にしちゃあよく出来た方だな！」

『！』

「おっ、ツンデレだー」

『馬鹿、何処がだよ…』

「あ、あの……」

「『？』」

男達が盛り上がって会話している中に、椀は言葉使いを戻して割って入った。

「貴方は人間なのですか？」

「うん、人間だよ」

男はためらいもせず、むしろ生き生きとした声音で答える。

やはり人間だった。ならば椛は、白狼天狗として山から追い出そうと弁明しようと試みた。

「…えーと、貴方が人間である以上はこの山に居座ることはできません。妖怪に食べられなくなれば、大人しく麓の村へ……………」

しかし、グレイガビーストは椛の話の途中でありながら独り言のようにヒソヒソとグレイガに話かける。

「…ねえグレイガ、この娘いきなり何言ってるんだろ？」

『さあな。それに完全に演説口調だな。ダメだな全然。伝わんねえよ。それに仮にでも恩人に向かってその言い方はねえだろ』

「…おい貴様ら、完全に聞こえているぞ？」

椀は、ついさっきまでの口調に戻った。拳をワナワナと震わせ、いつでも殴る準備は出来ている状態だ。

「…ねえグレイガ、この娘の喋り方 ド下手じゃない？」

『完全に演説口調だったよな。ダメだな全然。なってねえ。みそ汁で顔洗って出直してきた方良いつて』

「…ハッ！…！」

『「グボオアッ！…！！…？？」』

椛は殴らなかった。そのかわり、GBの喉を大剣で殺意を込めながら突き刺した……が、

「（…貫通しなかった）」

GBは数メートル飛ばされ、木々に激突し地面に墮ちた。が、体を一回転させ、すぐに起き上がる。ちなみに喉は無傷であった。

『ッ…あの小娘、中々やりやがるぜ……』

「…ウフフ、癖になるでしょ？」

『それはねーよ…』

椛は、男の態度がここまでくると呆れてくるのを感じた。

まあ、この男ならば中級妖怪くらいまでなら太刀打ち出来るだろうと思ひ、椀は人里の方角を指差した。

「あつちの方へ山を下ると人里へ出る。お前はここにいるべきではない。早々に立ち去れ。」

「え、あつち？ ……つてアレ？」

気が付くと椀はいなかった。

「…あ、ちよっとッ!？」

男がよそ見をしている時に白狼天狗特有の速さで逃げられたのだろっ。

しかし、男は諦めてはいなかった。

「…グレイガ、僕の嗅覚底上げして」

『なんだ？ あの小娘の後でも追うのか？ やめときな。相手は妖怪の山の社会に関わってるヤツだぜ？ 人間が首突っ込んでモロクな事ねえぞ』

「いいから。諦めたくないんだよ。フラグをさ。それに社会作ってるくらいなら色々情報入ってくるでしょ。君の封印の事とかさ？」

『…チツ、そうきたか…。分かったよ。そろ』

「…何も変わってないよ？」

『そう急くなよ、直にわかるさ』

「ふうん…」

グレイガは、先程彼女が立っていた所に寄り、なにもない空中を嗅いだ。

「…おおッ！！？」

グレイガは匂いが分かっただらしく、クンカクンカしながら闇へと消えて行った。

その姿は、とてもシユールであった。

椀は今、夜の妖怪の山にある滝の裏にいる。

そこには少しの深さがある洞窟があり、古びた小さい寺が建てられていた。

昔、誰が建てたのかは覚えていない。が、今は無人なので椀はそこを塹にしている。

寺は、中へ入ると六畳ほどの和室が二つあるだけで、とても簡単な作りだ。

そしてその部屋には、青緑色の髪をツインテールにし、緑色の帽子をかぶっている青いドレス……のような作業着を着てちよこんと

座っている少女が一人。

ここに寝泊まりしている妖怪は椀だであるが、憩いの場にして
るのは椀だけではなかった。

「おお、随分遅かったね」

「全く、夜警も楽しじゃないですよ…にとりさん」

にとり、と呼ばれた少女は「ちよつと待ってるよ」と、寺の押
し入れの中をガサゴソと漁り、茶葉と急須と湯呑みを取り出す。

「ほら、疲れてるだろうから これでも飲みなよ」

と、にとりはお茶を湯呑みに汲み 椀に渡した。それを椀は一気
にゴクゴクと飲み干す。

「…ぷふあ、ありがとございます。生き返りました。それにしても聞いて下さいよ。今日は色々なことがありましてね…」

「へえ、どんな？」

桜はあの短時間で余程のストレスが溜まったのか、愚痴るようにとりに話した。

外来人のこと。

ぬっすっぽんのじよ。

実は外来人が変態だったこと。

いきなり巨大な狼の光がでたこと。

外来人がその狼そっくりの鎧をまとい、ぬっぺっぽつと戦い、倒したこと。

二人きりになり、そんな嫌な状況からすぐに逃げ出したかったため、適当な事を言い人里へ向かわせたこと。

全てを話し終えると 椀は背伸びをし、天井を向いて寝転んだ。

「あ、全く色々ありすぎて疲れましたよまったく」

「…その盟友、できれば連れてきて欲しかったな」

「いやいやそんな恐ろしい事、例えにとりさんの頼みでも聞けませんよ……」

「え〜!？」

にとりはブーブー椀に文句を言った。が、次の一言で杭を刺した。

「…むしろここに来る途中、よく考えると人里の女子に変な事をする可能性が高いと思い、やっぱり呼び止めようかと思っただくらいですから……」

「そ、そんなに…?」

「ええ、そんなにですよ」

椀はにとりの問いに軽く答えると、目をつぶる。

夜は明け方に近づく。それにつれて夜警の疲れが来たのか、眠気が襲つ。

「……く……か……」

余程疲れたのか、椛は三秒で睡眠欲に心をゆだねた。

「あゝ、風邪ひくよ……って、聞こえちゃいないか……」

椛がスヤスヤと寝たのを確認したにとりは、押し入れから布団を取り出そうとした。

…が、

「ごめんくださいー！」

寺の玄関から男の声が聞こえた。

「…誰だろ？ 桜の知り合いかな？」

あれからどれくらい時間がたったのだろうか？

椀は目をバチツと開くとすぐ起き上がり、周りを見渡した。

辺りはまだ暗い。どうやら寝ていたのは短い時間だったようだ。

しかし、にとりがない。

「…ん、あれ……………」
「……………」

椀は目を擦り 隣の部屋を開けようとしたが、その部屋からとりの声が聞こえた。

「んで、このチップってさ」

間違いない。この声はにとりだ。しかし、違う男の声もする。

「ならダブってるやつあげ」

この声を聞くとなぜか寒気がした。

椀は、おそろおそろ部屋を区切っている襖を開けた。するとそこには……

「おお、流石 盟友！ 感謝するよ！！」

手に黒い小札、バトルチップを持ち、目を純粹な子供のように輝かせるにとりと、

「あはははは〜／＼／＼ お、もみたん、起きたみたい。元気〜？」

椀の中で、二度と顔を合わせたくないランキング堂々の第一位を誇る、狼の鎧を纏った変態がいた。

「…悪夢か、これは？」

「あ、椀 私このチップ分解したいからラボに戻るね〜」

男はにとりが開けたまま出て行った縁側から殴り飛ばされ、寺に被害を加えぬまま滝に落ち消えて行った。

変態さんも 寺の 縁側から 退室しました

「一体なぜあいつが……!!」

椀は冷や汗を垂らし、男が消えて行った滝へ身構えた。

あの男ならば、滝を昇ってでも はい上がってくる可能性がある。
……が、しかし。

「うふふ、そんなに照れちゃって可愛いなあもつ……」

椀は後ろを振り向いた。すると、いつの間にか男が無傷で立っていた。

「……ッ！！！！（……いかにかん、冷静になれ私……）」

椀は悟った。この男はありとあらゆる物理攻撃を無効にする。

深呼吸をすると、男に面と向かい話しかけた。

「……なぜ私を追う？」

後に、椛はこの質問をした事を後悔することになる。

「君に一目惚れしたからさ」

「…じぶっ」

椀は胃から込み上げてくるモノを必死に抑えた。

「ちょ、ヒドいなあ。でも、そんなトコもまた…」

『…おいおい、話し進まねえぞ？』

突如、彼からグレイガの声が聞こえた。

「あっはっは！ そうだね、冗談はこのくらいにしておっじいちゃんか！」

「じよ、冗談……?」

その一言を聞くと、不思議なことに椀の食道あたりまで来ていたモノが一斉に胃へと戻って行った。

「…500分の1くらいが冗談だよ?」

「…おうえ……」

「ちよっ、吐くことないでじよ……」

男は椀に止めを刺した。

「それでは、理由を説明して頂きます」

「…はい」

椀に たこ殴りにされ、顔がボコボコになったグレイガビーストは 和室に正座し直った。

「ええとね、まず僕の外見、いつでも解除と変身できるらしいけど、他人に見られると厄介じゃない？」

「ええ、人間からすれば異質そのものですからね」

「だからそのリスクを少しでも無くする為にここに来たんだ」

「ほう……で私の後を追いつけた理由は？」

男は自信満々に答えた。

「それは勿論、君を愛して」

何処から取り出したのかは分からないが、椀は男に大剣を突き立てる。

「…他に行くアテがなかったんです」

彼は泣き目で答えた。

「成る程…、なら仕方ありませんね」

「えッ!?!」

男の目が一瞬にして希望に満ち溢れた。

「野宿しなさい」

その目の輝きは一瞬にして失せ、絶望へと変わった。

「それはないよ… 僕だって24時間365日起きてる訳じゃない

んだから。寝込みを化け物に襲われたらやらねちゃっよ……」

「…ならば私にどうしろと？」

男は椀に深く土下座する。

「ここに置いて下さい。何でもします」

「よしよし、置いてあげますから私の半径千里以内に寄らないで下さい」

「訳わかんないよッ！…！ それに何でもってそういう意味じゃないよッ！…！…！」

「…なら、何をしてくれるのですか？」

男は少し考えた後、指を折ながら答える。

「掃除、洗濯、炊事、君の仕事の手伝い、話し相手、友達、恋人、結婚相手、ええと……」

「…もう結構です。帰って下さい」

「嫌だ！！　せつかくここまでこれたんだ！　インビジブル！！」

インビジブル

一定時間透明になり、殆どの攻撃を無効化する。

「もうこつなったら君の守護霊になるよー！！」

この男のストーリーカーぶりには、流石の椀も堪忍袋の尾が切れた。むしろ尾が切り刻まれた。

「黙れ悪霊がッ！！！！ 今すぐここから立ち去れ！！！」

「ああそつだ。自己紹介遅れたね！」

男は彼女の話を見殺し、半笑いで椀を嘲笑いながら喋り出す。

「僕の名前は【グレ夫】、よろしくね〜！ もみたん〜」

「…死に晒せッ！！！！」

椀はもう耐えられなかった。大剣で男…、グレ夫を切り裂こうとブンブン振り回すが……。

とした表情の にとりが寺の様子を見に行くと、そこは荒れていた。

壁が壊れ天井に穴が空き、荒れに荒れた寺の中には インビジブルの効力が切れ その隙に一撃を入れられ気絶して倒れたグレ夫と、勝利に歓声を上げる椀がいたそう。

東方獣狼鳥 一二話【ファル夫の外見Ⅱ光彩斗】

く八雲の屋敷く

幻想郷の北東の端に、一軒の古びた和風の屋敷がある。

今、この屋敷の茶の間に、ちやぶ台を挟んで人影が二人座っている。

片方は所々に藍色で彩られている服に身を包んでおり、頭からは狐の耳が突起している。そして彼女には、狐の尻尾が九つ生えていた。

「…紫【ゆかり】様、博霊大結界が2ヶ所、紫様が張られている結界が2ヶ所の計4ヶ所が一時的に破られました」

その人影は、肩口の開いた紫色の服に身を包む女性に話す。

「……………」

紫と呼ばれた女性は、目を閉じ 俯いたまま腕組みをし口を閉ざしている。

「さらに紫様が過去に封印なされた幻想獣の気配を山にいる橙【ちえん】が感じ取ったと……………」

紫はとても深刻そうな顔でさらに俯いた。狐耳の女性は、これは
一大事なのでは…、と思ったが ある事に気付いた。

彼女の口元からよだれが垂れている。

俯いている紫の頬を、狐耳の女性がぺちぺちと叩く。

「……………ハッ!？」

紫は、眠りから覚めると 何事もなかったかの様に 扇子を取り出し口元を隠す。

「…ええ 勿論聞いていたわよ、藍【らん】。確かに油揚げにマス タードは合わなかったわね」

主人をジト目で見る藍。え、違う？ と動揺する紫。

「…ハア、紫様はこの時期 は冬眠をする頃。無理をして起きて頂 いている事は承知の上ですが事態の収束を」

「別にいいんじゃない？」

「…と申されますと？」

紫は軽く受け流した後、大欠伸をし自分の睡眠不足をアピールした。藍は無表情で詳細を聞く。

「あの獣達は単体だと弱すぎて話しにならないわ。仮に封印を破った所で、何も出来ずにまた封印されるのがオチよ」

「…承知しました。それでは」

藍は音を立てずに、部屋からスッと消える。紫は寝室へと自身の【隙間を操る程度の能力】で空間に隙間を入れ、一瞬にして寝室へと移動した。

そして、布団に潜り込んだ彼女は目を閉じた。

「単体なら……ね……」

自分で言った言葉に怯えるように呟いたその後、紫は目を閉じ眠りに着いた。

数秒で彼女はいびきをかきはじめた。せつかくの気品さが台なしである。

く妖怪の山、山道く

一軒の屋台に、ミスティアとファル夫がいた。彼女は彼に鰻丼を作っている。ちなみに、ファル夫は獣化を解除し人間状態である。

「……しつかしよ、まだ信じられねーぜ。ここが俺のいたトコと違うって事がよ」

ファル夫は頬杖を着き、ありのままの感想を述べた。

「私は貴方が夜雀じゃないって事にガツカリしたわ…」

そうは言いながら、ミスティアは手際良く鰻を焼いていく。彼は
どうやら自分が人間だと言うことを証明出来たようだ。

『まあまあ気を落とすな、ミスちゃん…』

そんなミスティアを慰めるファルザー。ファルザーは今、アニメ版のようにPETから手の平サイズでホログラム化され、ファル夫の肩にちょこんと乗っかっている。

「お前、ミスちゃんって…。…それより、俺のPETに何したんだ

よ？ P E Tはホログラムなんてだせねえぞ？」

その質問にファルザーは目をキラリと光らせ、待ってましたと言わんばかりに話し出す。きっと説明好きなのだろう。

『ああ、それについてだが 儂が住むにはちと狭かったからな。データを真つさらにし 儂自身の要領を圧縮させ、本来5エクサはある儂の要領を一気に……』

「細けえ話しは良いから簡単に説明しろッ！」

ファル夫はファルザーの話しに頭を抱え、ファルザーは残念そうに舌打ちをした。一方 盛り付けに入ったミスティアは「何の話しだろ？」と耳を傾けた。

「…簡単に言うのだな、P E Tのデータを全てデリートし、儂が住みやすいようにプログラムや回路を分解、再構築したのだ。ほれ、試しに画面をタッチしてから空中に四角形を描いてみる」

ファル夫は言われた通りにPETからタッチペンを取り出し、それで画面を突いた後 空中に適当な大きさの四角形を書いた。

すると、その描いた空間がパソコンのモニターのようになり、その中には電脳世界が広がっているのが見えた。

「スゲー…！ でも書き換えただけじゃ無理ありすぎだろ！」

ファルザーはククク…、と自慢げに笑い、ミステリアも空夜と同じように驚いた。

「へえ、外の世界はそんな物もあるんだ…、っと 鰻井出来たよ！
ハイお待ち！」

ミステリアは鰻井をファル夫の前にコトリと置く。彼はいただきますと手を合わせ、言った瞬間にガツガツと食らい付く。

そんなファル夫をミステリアは優しく微笑みながら見つめる。

「ふふふ…、おいしい?」

「おう、ウメエゼ!」

「そ、そう…? えへへ／＼／」

ミスティアは後ろを向いて照れ笑いを隠した。しかしファル夫達にはバレバレである。

そんなミスティアを見つめる中、ファルザーは彼にヒソヒソと話し掛ける。

『（これはフラグだぞファル夫ッ!!! 押せッ!!! 一気に押すのだッ!!!）』

「（お前、この程度でフラグってな… 現実見ろよ。ここ幻想郷だ

けど)」

そんなファルザーを彼は軽くあしらった。ファルザーは少し涙目になった。

「…っとそつそつ、食べながらもいいから聞いてくれる？」

『「…?」』

ミスティアは半回転し、ファル夫達の方を見た。

「貴方達、これからどうするつもり？ 元の世界に帰りたい？」

「どっつするって…、決まってるんだろ？ ここにいる！」

『…一応は聞くが、現代に心残りはないのか？』

即断即決を下す空夜に、ファルザーは問い掛ける。それ以前に、空夜とファルザーは契約に近い形で封印を解くという課題があり、強制的にもこの世界に残ることにはなるが。

「あつちの世界は飽き飽きしてたんだし構わねえよ。それに、こっちは退屈しなくてすみそうだからな」

『…だそうだ』

ファル夫は いつの間にか完食し、割り箸を置きこし馳走様と手を合わせる。

「鰻井、つまかったぜ。そんじゃ、元気だな！」

空夜は席を立ち、そのばから去ろうとした……。が、

「ま、待ってッ……！」

ミスティアに呼び止められた。

『（ファル夫のやつ、まさか本当にフラグを……！？）』

「……なんだ？ 俺はこれから こいつと一緒に」

「
お代
」

「…は？
」

彼はその台詞に呆気にとられた。しかし、彼女はふざけてなど

はいなく、目は真剣であった。

「…お前、さっき”おごる”って言ってたよな？」

「それは貴方が妖怪だった場合ね。今は事情が違うわ。人間相手なら代金貰うわよ？」

急にされた理不尽な対応に、ファル夫は冷や汗をかく。ファルザはそんな彼に一つ質問をした。

『おい…、有り金はいくらだ？』

しかし、ファル夫は無言のまま俯く。

『おい…、有り金は いくらだ？』

とても大事なことなのでファルザーは2回聞いた。そもそも、もしあったとしても現代の金がちらで使えるとは限らない訳ではあるが。

「…………ツケ」

『人間相手は信用出来ないからダメ』

ミスティアは爽やかな笑顔で人差し指を交差させ×を作った。

「チツ、ファルザー！ テメエもこいつに何とか……」

『全く、人間は信用できんよなミスちゃん？（……許せ）』

「ホント、これだから人間は嫌なのよファルちゃん……」

いつの間にか手の平サイズのファルザーはミステアの頭の上に乗っかっていた。裏切った。あの野郎。いつか焼鳥にしてやると心に決めたファル夫である。

「まあ、払えないなら人買いにでも売り飛ばそうかしら？ 貴方みたいな可愛い男の子なら十分高く売れるだろうし……」

「…ファルザー、こいつ何言ってるのか分かるか？」

もはや理解不能だった。ファル夫は何も特徴もない、どこにでもいそつでよくいる顔であり、高校生。

そんな理解に苦しんでいる彼に、ミステリアが手鏡を取り出し渡した。

ファル夫は鏡で自分を見たが、それにファル夫は写っておらず、代わりに少年が写っていた。

「…ッ！！！！??」

自分の変わりようにファル夫は驚いたが、それ以上に 彼は、その少年に見覚えがあった。

「…なんで俺の顔が光彩斗【ひかり さいと】になってんだよ…?」

ファル夫は、さらに体に異常がないかを調べた。

体つきが小学生並になっている。

声がいつの間にかロックマンと同じ声になっていた。

髪型、光彩斗と同じ 真似しようにも髪の長さが ある程度なければ難しい髪型になっている。

…どうしてここに来るまでに気付かなかった？

「…ファルザー、こいつはどういうことだよ？ 十文字以内で説明しろ。でなけりゃ殺る」

ファル夫は自分の体を おかしくした犯人だと思われるファルザーをギロリと睨む。その眼光はとても恐ろしく、先程まで笑っていたミステリアでさえも一瞬体をビクツと震わせた。

ファルザーはドヤ顔で彼に言い放ち、その後「フン……」と鼻で彼を嘲笑った。

サイトバッチ（バトルチップ）
ナビの遺伝子を光彩斗に100%同調させ、ナビとしての潜在能力を解放させる。

「凄いわファルちゃん！！ 音は十文字以内よ！！！」

「……文字は12文字だな。殺る」

『いやな、儂が相手にした小僧がサイトバッチを使っている、最後に儂が体に乗った時に、その小僧の遺伝子を刻まれてな……、それがお前に影響を　　ッ！？　ま、待つのだファル夫ッ！！』

説明に夢中だったファルザーは声を荒らげ、ファル夫はいつの間にかに振り上げていた拳をピタッと止める。

『こんな事をしている場合ではない！　ここで半殺しにされて売られるか、体で払うかどちらか選ぶのではなかったのかッ！？』

「体ってどういう意味だよ…？　つか、いつの間にそんな選択肢がでた？」

彼は一瞬、体ってどういう意味だよ？　と思ったが、ミステリアがそこに横槍を入れる。

「私はどっちでもいいわよ。……べ、別に体でも／＼／」

『……………』

ミスティアは顔を赤らめながら恥ずかしそうに俯いた。ファル夫とファルザーは思った。あながち発情期というのも間違いではない。流石はピンクバードと言ったところか。

『ファル夫、儂と変われ。儂が体で払う』

『…労働って意味だからね？』

そのミスティアの台詞に、ファル夫は悔しいような安心したような微妙な表情を浮かべ、ファルザーは思い切り舌打ちをした。

「まあ、売られるのは勘弁だな。働いて返すしかねえよな……」

『（…僕の封印の事を忘れる事は許さんぞ？）』

「（分かってるっての…）」

「分かったわ。それじゃあ今から貴方は店員ね！ 早速接客の仕方を教えるわ！」

「お、おうッ！」

ミステリアの急に高ぶるテンションに置いて行かれないよう、彼も負けじと声を上げる。

「ふふふっ、そんなに緊張しなくてもいいのよ？ もっと楽に、ね？」

「…おっ」

『（ククク…、完全にミスちゃんのペースだな）』

そんな二人の様子を、ファルザーは実に楽しそうに少し離れた場所へ移動して見守っていた。

『（しかし、ミスちゃん…）』

ファルザーはミステアが彼に接待の仕方を教えているのを見ていると、ある事に気付いた。

『(あれだけ人間を嫌がるそぶりを見せていたわりに…)』

『(…とても楽しそうだな)』

東方獣狼鳥 一三話「グレ夫」光熱斗

く妖怪の山、滝裏の寺

「はあ……、どうしてこんな事に……」

「まあ気を落とさないで」

男から貰ったチップを分解し終えたにとりは、一戦で疲れきった
杖をなくさめる。

そして杖はこの人間、グレ夫と名乗った男をこれからどうしよう
か迷っていた。

「どっしりまじょうか、このまま起きなかつたら滝壺に刻んで捨て……ん？」

突然、気絶したグレ夫がいきなり青白い光を放った。

呆気に取られた椀にとりが見ていると、グレ夫が纏っていた狼の鎧が蒼い光となって消え、中からはあの変態な男ではなく見知らぬ少年が気絶していた。

「え……？」

「おおー！？」

髪は一見ボサボサのようだが纏まっており、背丈は小学校高学年程の高さ。

椀にとりは少年をまじまじと見ていると、少年が目を覚ました。

「…づぐッ!?!、体のあちこちがあゝ…」

少年は目を覚ましたとたんに泣き目になり、体が動かないのか気をつけの姿勢で硬直した。

「あ、あの……」

「うん？」

「…どちら様ですか？」

桜は恐る恐る彼に質問した。一方にとりは彼の変身に「すげー！」と目を輝かせながら感動している。

「…僕だよ。もみたん、もしかして忘れっばい？」

その口調、まさしくグレ夫であった。彼だと理解した瞬間、椀はゴミを見るような目で少年、グレ夫を見た。

「ちょ、失礼だね？ ……というか二人とも何？　なんで僕の顔ばっか見てるのさ…」

椀は、まだ気付いていない彼に自分自身の変化を気付かせるべく、押し入れから等身大の鏡を出し、彼を映した。

「あれ獣化が解けて……、…ん!？」

ようやく理解出来たようだ。グレ夫は慌てるようにポケットからPETを取り出しグレイガを怒鳴るように話し掛ける。

「グレイガッ！　これ何!?　何で僕の体が光熱斗【ひかりねつと】になってんの!?!？」

椛とにとりは、「誰と話しているんだろう?」と思った瞬間に、グレ夫の肩の上に手の平サイズのグレイガがホログラムで映し出される。

椛は、その愛らしいサイズのグレイガが現れたとたんに目を輝かせる。

『ああそれな、俺が元居た世界の”クロスフュージョン”ってやつの影響でな…』

クロスフュージョン

アニメ版。人間をベースにナビを融合させ、特定のエリア内で実体化させること。

『俺様がその熱斗って奴の攻撃を受けた時、そいつの遺伝子データが強すぎて俺様に流れてきちゃってな……』

椛とにとりはグレイガの話について行けず、と言うよりもグレイガの登場にあぼーんとしている。

『熱斗の遺伝子データの構造がテメエを蝕んだってことだ!』

説明し終えたグレイガはグレ夫を嘲笑うようにゲラゲラと笑う。

「ふざけないでよ!!　すぐ元に戻してよ!!」

『そいつは無理だな…。テメエの遺伝子データなんざ覚えてねえからな!!』

四つん這いになり落ち込む荒野。そんな彼をさらに笑うグレイガ。

「…精神年齢高校生で外見年齢小学生って何さ……?」

彼は試しに拳に力を入れてみる。……が、結果は予想通り。力は小学生並に落ちているのを実感した。

「……なんか、親から貰った体が無くなるってさ……、もつさ……、なんかさ……。」

どん底まで落ち込むグレ夫。

すると、椀がグレイガの方を見つめながらグレ夫へ尋ねる。

「あの……。」

「……なにさ？」

グレ夫は顔を上げないまま、少し不機嫌そうに答えた。

「あの狼は貴方のペットですか？」

「（…もう、どうにでもなれ…）……………うん」

その質問にグレ夫は首を縦にふる。イエスという意味だ。

『はあッ！？ テメエ、俺様がいつテメエのペットに…！！！！』

次の瞬間、グレ夫はガバツとグレイガを直視し、瞳孔を開き一瞬にして血走らせた目に怨念を込めながらグレイガを睨みつけた。グレイガは体をビクツと震わせ、負け犬の如く椀の後ろに隠れガクブル震える。

今のグレイガは手の平サイズ。相手であるグレ夫を例えるならば

巨人。電腦獣でも、獣として バツチり開いた目に睨まれると怖いのだらう。

「わあ／＼／＼ …… ってアレ？」

一方、そんなグレイガを可愛がるうとする椀だが、相手がホログラムのため手がグレイガをすかすかとすり抜ける。

『…今の俺は簡単に言うなら幻だ。触ろうとすんのは諦める』

グレイガはガクブル震えながらもあくまで冷静に説明する。

「そ、そんなッ…！？」

まるで大事な物を壊された時と同等な悲しみが椀を襲った。

「もみたんもしかして…グレイガ気に入った？」

その一言に椀は顔を赤くして否定する。

「ち、違いますよッ!? 私はこの狼ちゃんがエロカッコイイだなんてこれっぽっちも思ってもせんからッ!!!」

「(グレイガって狼だとエロカッコイイ部類に入っちゃうの!!!?)」

「(知るかッ!!! つーか会話のキャッチボールがなりたってねえ!?)」

彼女の不思議な一面に、先程まで不仲だった一人と一匹はボケと

ツッコミをこなしていく。

「ねえ盟友、この機械バラしていい？ ていうかいよね。いいよね！？」

今まで空気と化していたにとりがよだれを垂らしながらグレ夫のPETを指差し、ドライバーを取り出して掲げる。

「PETはダメ！！ やるならグレイガにして！！！」

『テメエどういう見たゴラアああああッ！！！！！！！！ テメエ表出る！！ ぶっ潰してやっからよッ！！』

「ハッ、ホログラムの君に何ができるのさ？」

『椀、やっちまえ！！』

「はい、グレイガ君！！！」

「ちょ、グレイガ君ってもみたん……げふウツ！！！！！！？」

椛は恐るべき速さでグレ夫の腹に蹴りを入れる。彼は数メートル飛ばされ、寺の柱にぶつかり首がありえない角度に曲がる。

『ギャハハハハッ！！ 俺達に勝てる訳ねえだろオツ！！！！！！』

「フフフ……」

「だ、大丈夫盟友！？ 椛やり過ぎ」

「アアアアアッ！！！！ グレイガ！！ もみたん！！ 流石に怒るよッ！？」

「…へ？」

グレ夫は自分の首を自分でゴキツと元の角度に戻す。この不死身

具合に、流石のにとりも言葉を失った。

『テメエがキレたって俺様に指一本触れることあ出来ねえよッ!』

「バトルチップ、バグシュウセイ スロットイン!」

グレ夫は鬼の様な表情でチップをPETに差し込む。

バグシュウセイ

ナビに起こっているバグを全て治す。

∴ちなみにグレイガはバグのかけらの集合体であり、バグシュウ
セイはバグを直す(消す)物。

「フオオオオオオオオオオオツ！！！！？？ 痛いイ！！ 痛いイ
ウエアアアアアアアツ！！！！？？」

「嫌アアアアアアアアアアアアツ！！！！ グレイガくうううう
うんツ！！！！？？」

グレイガはまるで狂ったように その場で激しくのたうちまわっ
た。

いきなりピタッと止まった。

「…あ（……やば）」

彼はグレイガの危機を察知し、すぐさまチップを抜き取る。

「…大丈夫？」

返事がない。

「え、まさか……？」

椀の顔が青ざめて行く。

「いやいや、それはないでしょ。電脳獣だよ？ この程度で消えるんならエグゼの世界の科学省の皆さん苦労しないって。それにゲームだと獣化しながら使っても大丈夫だったしさ。それに」

とか言いつつも、グレ夫の顔も段々と青ざめて行く。彼自身もやっってしまった感があるのだろう。

「えへへ、解体解体」

空気を読むことが出来ない河童が約一名。

ピクッ

「「「!!!?!?」「」

グレイガの脚が動いた。彼は生きている。

「ハア、グレイガあゝ…脅かさないですよ。ヒヤヒヤしたよ全く………」

『…ここは、何処？ 私は……誰？』

やっぱりまだ危険だった。

る。

そしてグレイガに投与して記憶障害を治した後 きついお仕置き
を喰らったのはまた別の話である。

東方獣狼鳥

話【キャラ紹介せねば】

ファル夫

酉年生まれ。双子の弟にグレ夫がいる。普段は無愛想でテンションが低く、乱暴な物言いだが、調子に乗ると熱血な性格をさらけ出す。

趣味はバードウォッチングで、学校や寝る時以外は山へ出かけていた。

その悪い言葉遣いに似合わず、植林活動に積極的に参加していたりする。

萌えを受け入れず、燃えを受け入れる人。

ファルザー派で、グレイガ派の弟を嫌っている。

この度、外見が光彩斗となってしまうた。

グレ夫

ファル夫の双子の弟。ただし成年生まれ。性格や言動が非常識。体の強度も非常識。

特技は犬の調教で、将来の夢はブリーダー。

ファーストキスの相手は犬。

萌えを讃えて燃えを叩く人。

ファルザー大好きな兄と度々 衝突し合う。

偶然、光熱斗の体に造り変えられた。

ミスティア・ローレライ

歌で人を狂わす程度の能力で外来人を鳥目にし、見えなくなった所でむしゃむしゃしてしまう妖怪 夜雀。

なお、夜雀の鳴き声は「ちん、ちん」もしくは「ちっ、ちっ」である。卑猥。

そんな鳴き声で激しい歌を歌う。いいぞ、もっとやれ。

犬走 椀

妖怪の山では下っ端な白狼天狗の一人。聴覚、嗅覚、視力が尋常でない。常識人で苦勞人。

グレ夫のストーカーの被害者。

彼女の戦闘力ではグレ夫を危める事が出来ないが、別に彼女が弱い訳ではない。寧ろ人間から見れば十分強いはずなのだが。

河城 にとり

桜と暇な時間に、よく将棋を指している。

工業や機械系の知識に長けており、科学力は世界一で その力は宇宙最強のエンジニアも真っ青になる程。

人間を盟友と呼び慕う。

ファルザー

あの電脳獣。エグゼ6でカーネルに止めを刺されたかに見えたが、残留データが時空ごと結界を飛び越えてやって来た。

幻想郷で少し暴れたが、スキマ妖怪に本気でデリートされかけた上に 魔界に封印された。

声が渋い。

何故 時間軸まで越える事が出来たのかは不明。

グレイガ

例の電腦獣。クロスフュージョンの事を語っていた事から、ビヨンドードでワイリーに造られた方だと言う事が伺える。

あちらの世界では、最終的にファルザーに打ち勝ち そのファルザーのデータを吸収し、超電腦獣「グレイザー」となりロックマンを襲った。

が、所詮は（噛ませ）犬。ロックマンの敵ではなく、普通にデリートされた。

不完全な状態でやられたグレイザーは幻想郷へと流れ行く途中、時限の狭間でファルザーのデータが大幅に削り取られてしまい、幻想入りする時には既にグレイガ単体となっていた。

こちらも幻想郷で少し暴れたが、ファルザーと一緒に封印されてしまった。

何故 時間まで越えれたのかはやはり不明。

声は若々しい元気な男。

東方獣狼鳥

話【キャラ紹介せねば】

(後書き)

ここから亀です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1076ba/>

東方獣狼鳥

2012年1月2日17時53分発行